

福澤諭吉著「福翁百話」日本経営合理化協会出版局 2001年2月9日刊を読む

1. (1) 国民が自国の利益のみを追って他の痛痒^{つうよう}をかえりみないのは、世界の公然たる事実であって、国同士の交際の真の面目には、義理人情などないと言ってもよい。
 - (2) 虚心に気を落ち着け、自在で公平な眼で観察すれば、芥子粒に等しいこの地球の表面に、ちっぽけな人類があちこちに群を成して国を分け政府を立て、たがいに利害を異にしてたがいにささいな事を争い、そのためには往々にして詐欺や脅迫などをおこなってそれを「外交政略」と称し、乱暴殺人の方法を工夫して「軍備国防」と名づけ、心を勞し財^{つひ}を費やして実際に人間の安寧^{あんねい}幸福をそこない、事物の進歩改良をさまたげながらかえってそれをみずから誇り、それを「忠君愛国」などと称する。実におかしなことだ。
 - (3) 要するに、今の俗世界では、愛国心の迷妄を脱し、万物の靈長である人間の一生の自然な本分を勤めるのでなければ、人間の天与の幸福がいくら大なるものであっても、それをむだにして、悲惨な境涯にむなしく苦しむだけなのだ。
2. (1) 以上の立言がもし間違っていないならば、開闢^{かいびやく}以来今日に至るまで、世界中の人民はただ、相互の衝突のうちに煩悶^{はんもん}して、死んで生まれ、また死んでゆくということを繰り返しているだけなのだ。まことにあわれむべき次第ではあるが、さらにあたりを広く見回して人文の進歩の実際状況を見れば、その遅々たること、まさに驚くべきものである。
 - (2) 百千年来、世に「人傑」なる者を輩^{はいしゆつ}出し、「一視同仁^{いつしどうじん}」(だれかれの区別なく、すべてのものを平等に愛する)や「四海兄弟^{しかいけいてい}」(礼を守ってゆけば、世界中の人はみな兄弟である)などと唱えて、人間がたがいに和して助け合う理想の主義をわずかに口にしたものもないわけではないが、単にそれはその人の願望を述べたというだけであって、それは実際に世におこなわれたどころか、まったく事は正反対であった。「一視同仁」はさておき、世界の兄弟がたがいに接すれば、奪わねば奪われ、殺さねば殺されるといった獣の劇を演じることこそが、是非なきこの世の運命であるのだ。
 - (3) したがって、今の世の立国者が「外交」と言い「国防」と称するものは、いわゆる正当防衛の必要にうながされたことであって、それはすなわち、禽獸^{きんじゆう}に接するに禽獸をもつてするという方法であるので、「一視同仁^{いつしどうじん}」などと口にするだけでも迂闊な話であり、いまは「生存競争」の四字をもって立国の格言と定めてしまった

3.(1)結局、それは人文の未開さゆえのことであって、個人の罪ではない。それは獣類の戯^{たわむ}れと言ってもよいだろう。すでに禽獣の世界にいてたがいに生存を争おうとするには、その手段の醜美などは選択の余地はない。あるいは「権利義務」と言い、あるいは「同盟義侠」と言い、いわゆる万国公法の許す限りに外面をよそおって、その内実はただ、自国の利益を追求するだけなのだ。

(2)よって、その国民を教導する方法も、自然と自利一辺倒の主義にもとづき、平時には貿易の利を争い、有事の日には兵馬の勝敗を決する覚悟で、それを経済学に説き忠義愛国論に論じて余念がない。

(3)一見、それはたいへん殺風景なようであるが、たとえるなら、それは医師が病人に対して薬を与えるのに違いはない。本来薬品は人身を養うような性質のものではないが、すでに病気にかかっているならば、平均した生命力を維持させるために、一時の方便としてそれを用いねばならない。よって、今日各国が相対しておのおの自国の利を主張して愛国心に燃えるといったことは、高尚な主義でもなく、万物の霊長たる人間には至極不似合いではあるが、いかんせん、この世界はあたかも病人の世界であって、人類の生存はわずかに競争によって維持されるだけなのだ。

(4)いっさい万事のことを競争ということから割り出すのであるから、自在で公平な眼から見れば笑うべきものが多いのだけれども、立国の実際においては、それを一笑に付すことはできない。ただ、人間の思想はきわめて^{れいみょう}霊妙深遠なものだという一義を忘れずに、たとえ口では生存競争の必要を論じ、また実際にそれを実行していても、その心の中の深い所では、それは病人の世界にはやむを得ない薬品だ、と独りみずから観念して、とにもかくにも思想の幅を広くするということが、わたしの祈念するところなのである。

P395 ~ 398

[コメント]

福翁百話の最終話の結論は「とにもかくにも思想の幅を広くすること」、つまり「教養の重要性」であると私には思える。

- 2009年7月30日林明夫記 -